

この前、中学校の国語の授業を参観した。中学3年生だった。教材は『故郷』である。もう50年にもわたって、すべての教科書に載っているため、覚えている方も多いのではなかろうか。魯迅の代表作である。いくつもの翻訳があるが、教科書では、竹内好の訳文が使われている。

以前から知っている方が授業者だった。もうだいぶ前になるが、国語の研修で出会った先生である。そのときから、熱心であり、意欲的に吸収しようとしている方だった。その後も、ご活躍の様子を耳にする度に、うれしい思いを抱いていた。

今回、授業を見ることができるといことで楽しみにして出かけた。教室に入る。雰囲気が良い。空気感の問題である。先生と生徒の関係が良いのがわかる。この時点で、おおよそ授業の成否は予想がつく。

授業が始まる。テンポが良い。授業の設計図である学習指導案では、導入に8分となっていた。ところが、実際には5分だった。実にコンパクトな導入だった。このコンパクトな導入というのがむずかしい。学習課題は、先生の方から提示しているが、生徒の学習意欲を引き出すような働きかけをしている。見事である。

この授業の学習指導案は、この日の授業者が作成したものではない。他の先生が作成した学習指導案で授業を行っていた。こんな経験は、なかなかできない。したがって、いつもとは勝手が違ったはずである。だが、そんなことは微塵も感じさせないところが、授業者のすばらしいところである。

授業者の発問に対して、生徒が発表した。驚かされた。レベルが高い。この時間は、『故郷』の5時間目である。それまでの4時間の授業が、どのようなものだったのかをうかがわせる発表内容だった。

生徒が書いている間に、机間指導をしていた。その様子は、日頃からやっていることがよくわかるものだった。この机間指導で、生徒が、どのようなことを考え、書いているかを、どのくらい把握できるかによって、その後の展開が変わってくる。授業者にとって、大事な作業である。

授業のポイント、ポイントで、授業者からの働きかけがあった。それが、的確だった。ぜひ、若い先生方に見せたい授業である。それも、解説付きで。経験が少ないと、この授業者のどこが、どのようにすばらしいのかがわからないかもしれない。

授業者が言っていた。夜中の3時まで、授業の準備をしていたそうである。何度も何度も、シミュレーションをしていたのだろう。私に来ることを当日になって知り、愕然としたそうである。招かれざる客ということか。

この日の授業を見て、なぜ『故郷』が、ずっと教科書に採用されているのかが、わかったような気がした。海外の文学作品であり、一見、むずかしそうに思える。だが、生徒からは、様々な考えが出てくる。授業者も、いくつもの指導法が考えられる。教師が、鍛えられるのである。生徒が伸びるのである。それだけ、価値のある作品なのであろう。

先生と生徒が、『故郷』を通して、自分たちで国語の授業をつくり上げている様子を見て、うれしくなった。この日の授業者には、これからも、この先生にしかできない国語の授業をつくってほしい。授業を参観させていただき、何だか清々しい気分になった。